http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2022年10月31日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信67号

上ノ原に設置した記帳台(6月18日)

目　次

■ 6月～10月の活動報告(事務局)……1
■ 2022定例活動②……2
「森林整備とリトリート」
◆開催報告(草野　洋)
■ 2022定例活動③……3
「防火帯刈払いとビオトープの手入れ」
◆開催報告(草野　洋)
■ 2022定例活動④……4
「奥利根水源の森林(もり)でリトリート」
◆開催報告(草野　洋)
■ 2022定例活動⑤……6
「草原と森の再生プログラム」
◆開催報告(草野　洋)
◇感想(松尾　和幸)
■「小さな地球」茅葺合宿リポート……8
◆参加報告(藤岡　和子)
□ 藤原だより(北山　郁人)……10
編集後記　※「野守のつぶやき」今号はお休みです

【6月】

● 9日　清水顧問が連携団体「日光下やボッチの会」の活動に参加。鹿害対策の知見など伺う。

● 14日　未来に残したい草原の里100選、第1回選定地域のプレスリリース。34箇所のひとつに上ノ原が選ばれ、読売新聞で紹介。

● 18日、19日　定例プログラム「森林整備とリトリート」実施。15名参加。作業の前後に小セッションを行い、茅場の保全活動と両立。茅の若芽に鹿害が見られたため、試みに一部鹿防護柵を設置。2日目は十郎太沢の水飲み場下側に3メートル四方の池を造成、ミニビオトープとした。

● 18日　前月上ノ原に設置した記帳台の正式なお披露目。すでに来訪者の記帳があり、パンフレットなども持ち帰っていただいている模様。

● 22日　リトリートの様子が群馬県のメディア「いまここぐんま」、」テレビ東京の「お仕事search! それってグッジョブ」にて紹介される。

【7月】

● 6日　全国草原ネットワーク総会。委任状対応。

● 16日、17日　定例プログラム「防火帯整備」実施。14名参加。この時期としては参加者が多く、多少の余裕があり、池およびアプローチの整備、散策通路や駐車スペースの整備、白樺の皮とりなど多彩な活動を行う。新設の池には、アメンボウ、鳥の水浴びなどが見られた。周辺にヤナギ、タニウツギを挿し木。6月は鹿による茅の芽食害被害が見られ心配されたが、被害は拡大していない。

● 18日　茨城県霞ケ浦環境科学センター小幡和夫先生他1名、上ノ原の希少植物視察のため来訪。

● 日本茅葺き文化協会「茅葺きだより7月号」で上ノ原の野焼きが紹介。

【8月】

● 上ノ原の茅を使用した福島の古民家葺替が完了したとの通知を受けとる。

【9月】

● 3日、4日　定例プログラム「水源のリトリート」実施。9名参加。奥利根水源の森の奥にある「田代湿原」の遊歩道散策、クロモジエキスの抽出作業、ビオトープに挿し木したヤナギ、タニウツギなどの活着状況の確認などを行う。

【10月】

● 1日、2日　定例プログラム「茅穂採取とミズナラ林整備」実施。11名参加。茅穂約15kg採取

(以下は次号で詳報予定)

● 18日　「草原の里100選」認定証授与式&フォーラムに北山塾長以下4名参加。塾長が授与後の1分間スピーチで「飲水思源」をアピール。

● 25日、26日　麗澤中学校「奥利根フィールドワーク」一年生165名を塾長以下インストラクター14名で受入。茅刈、古民家見学、自然観察等。

● 29日、30日　定例プログラム「茅刈り」実施。現地3名を含む33名が参加。

(以上)

■２０２０定例活動②「森林整備とリトリート」
-リトリートで上ノ原に池をつくりました-

草野　洋

梅雨の時季、自然の中での活動は天候次第です。そこで塾のプログラムも、今年は天候に左右されない簡易な茅場整備とリトリートを組み込みました。リトリートについては昨年、体験として実施したところ（『茅風通信 64 号』参照）、草原とゆるぶの森の新たな活用方法として期待され、今年から本格的に取り組むことになりました。

リトリート(Retreat)とは、語源は、撤退・退去・隠れ家など、つまり、日常からの一時的なエスケープ。”立ち止まり”自分を見つめなおす言動。大事な要素は「非日常」「体験」「振り返り」であり、上ノ原では里山の自然体験によって眠っている五感や身体感覚を開放し、その際の気付きを言葉にする内省対話プログラムとして活用。

この時季は雨の心配もあって、例年、参加者は少ないのですが、上ノ原のススキの背がまだ低くくてワラビなどの山菜も楽しめ、美しいタニウツギ（写真・左）やエゾハルゼミの大合唱のもと、沢水にも雪解け水が混じって心地よい冷たさを味わえます。そんな魅力を知ってか知らずか、コロナ禍の中で心身の癒しを求めたプログラムの魅力か、15 名の参加者がありました。

上 ノ原に不思議な空間が新たに登場しました（記帳台、写真・左）。この記帳台が今後上ノ原を訪れる人を歓迎して塾の知名度を上げてくれるでしょう。

天候に恵まれ、期待通りのエゾハルゼミの不思議な鳴き声の中、井上さん、柳沼さんのコーチでリトリートプログラムを開始。当初は、茅場の侵入樹木の除伐を森林整備として組み込む予定でしたが、すでに自伐林業のメンバーの手で大方済んでいたので、散策をしながら、途中で除伐をしてもらうことにした。

まずは、参加の目的と近況などを織り込んだ自己紹介でそれぞれが今の気持ちを表現。そのあと、十郎太沢を経て木馬道を散策。ビューポイントで一休み。新たに造成した茅場では、一斉に侵入樹木の除伐をやってもらい、その後ゆっくり広場に戻り岡田さんの野点をいただきました。この間、樹木・草花の解説やワラビ採りもありました。

地面と一体になる

今年はヤマユリ（写真・右下）とシオデが増えています。上ノ原の植生も塾の活動によって、少しづつ変化しているようです。

ヤマユリ　防火帯整備の頃に咲く

ゆったりとした時間を草原と森林で過ごして１日目を終了。明日は何を組み込むかと思案しているところに、どこからか「池をつくろう」とのご宣託があり、夕食後の懇親会で賛同を得ました。

そして２日目。井上さん、柳沼さんと打ち合わせして、「池づくり」の作業を主体にしたリトリートプログラムを実施することにしました。

幸いに「バックホー」が現場にあるので、これを利用すればそれほどの重労働にはなりません。まず、候補地の十郎太沢の水飲み場の道路下側の灌木をみんなで除伐します(写真・上)。小一時間で終了し、バックホーが入り池を掘り始めました。さすがに機械力、瞬く間に池の形が出来ました。周りを石で固めることで、水たまりでなく池らしくしていきます。そうして、せき止められた十郎沢に、３メートル四方程度の池がとりあえず完成しました。

この池は、上ノ原の生物多様性をかん養するビオトープ（有機的に結びついた生物群の生息空間）となります。また、水遊び場（スイカや体を冷やそう）や、いざという場合には防火用池にもなります。今後、池の周囲にヤナギを挿し木して土手を補強し、生物の隠れ場所となる石の配置や中之島、橋の設置など、これからの整備プログラムを考えるとワクワクしてきます。

この後、みんなで今日の感想などを述べ合い、急遽構成を変えたリトリートプログラムを終了しました。

これからも、茅場とゆるぶの森を利用した本格的なリトリートプログラムをお二人で展開していただければ、青水や上ノ原の知名度も上がります。そして一方で、青水の会員や汗をかきたい参加者向けには、茅場整備にリトリートを取り入れていく。今後のコラボの方向性が見えた今回の活動でした。

■２０２０定例活動③ 防火帯刈払いとビオトープ（池）の手入れ

草野　洋

７月１６、１７日、戻り梅雨の中、防火帯整備を行いました。

この時季の活動は、雨でなければ炎天下とあって、例年参加人数は少数です。ところが、今回は 17 人がエントリー。直前で体調不良で 14 人になりましたが、それでも盛況でした。やはり、コロナ禍でも出かけたい。それも自然豊かで心身が癒されるところへ・・・という想いでしょう。

1 日目は、作業中は雨もなく夕食後に降ったので、楽しみにしていた蛍の光がか細かったのは残念でした。2 日目は炎天下。作業終了後にスコールが来るという、幸運にも恵まれました。

メインの作業は防火帯の刈り払いです。エンジン付き刈り払い機 5 台に電動刈払機(写真・左下)が 4 台、それに日大水上演習林の職員の中澤さんが刈払機持ち込みで参加、計 10 台で常設防火帯と歩道を刈払いました。この作業は暑さの中のかなりの重労働ですが、皆さん楽しそうな作業ぶりです。いい汗をかき、達成感に浸っていました。

体力的に刈り払いを遠慮した残りのグループは、前回造った

ヤナギの挿し穂とり（上）と挿し木

池（まだ名無し）の周囲の植生を回復する目的で、「ヤナギ」と「タニウツギ」の枝を採って挿し穂をつくり、挿し木しました。挿し木はこの時季は適期、果たしてどの程度発根するか、この秋にはわかるでしょう。

この日の宿は天然温泉風呂のあるロッジ「たかね」、汗をかいた身体を癒すことができました。

降雨もあってホタル狩りは不発でしたが、藤岡和子さんから「野を食らう」と題して、発達障害のある子供たちとの心温まる交流やパーマカルチャー体験学習について語っていただきました。彼女の素晴らしい取り組みを何とか応援できればいいのですが、今後の青水の検討課題です。

2 日目は炎天下でしたが、前夜の雨が幸いした感じ。昨日刈り残した歩道を 3 人で仕上げてもらいました。

「池の浚渫・池畔の整備」グループは池に膝まで浸かり、スコップを使い底を浚いながら周囲を固める作業です。水温は 12、3 度でしょう。暑い中で気持ちよさそうでした。

もう一組は、北山さんの案内で「ゆるぶの森」の中のシラカバの樹皮剥きです。

立木に鉈で切り目を入れ、そこから竹べらを使いぐるりと円周状に剥いていきます。この時季の樹木は水分が多いので良く剥けます。この樹皮の内皮を細く割いて飾り小物などの細工に使います。ポシェット、バッグ、インテリア小物や網かごなどにも細

工できます。ネットを検索すると、実際の作品・商品を見ることができます(下記参照)。

「シラカバの皮細工-なかまの家 」
「自然素材の良さを味わう。あたたかみのある白樺細工の小物たち - キナリノ」
「アイヌの知恵を術を編み込んだ白樺のカゴ - 北海道・美瑛-スイノカゴ」等

外皮は着火材に最適で杣人(そまびと)がたき火の着火に使います。アイヌの人々はシラカバの樹皮で、スリッパや長靴を作っていたようです。樺細工と言うと秋田県の角館が有名ですが、この樺はヤマザクラのことです。

さて、樹皮を剥かれたシラカバはどうなるのでしょう。

樹皮とは幹の外側を覆っている部分です。樹体内部を外界から保護する形成層から外側の組織で、肥大成長に伴い外側から順番に剥がれていきます。さらに樹皮は内樹皮と外樹皮に分かれます。内樹皮は形成層の細胞分裂でつくりだされた師部のことで、生きた組織です。この外樹皮と師部の間に周皮があります。シラカバやヤマザクラは、最初にできた周皮が生き続け、肥大成長しても引き裂かれないよう、細胞数を増やしたり、細胞を長く成長させて繊維が発達し、この種類独特の樹皮となります。これが革細工に利用されるのです。

シラカバの周皮は何層にもなっています。この日剥いた内皮は薄皮が重なっているようでした。形成層と師部を残せば樹木は枯れることはありません。形成層を剥いてしまうと枯れるので、これを利用して立木のまま枯らす「巻枯らし（環状剝皮）」という技術があります。ただ、樹体内部を虫、カビ、紫外線、寒暑、湿気などから守るという、樹皮本来の役目が果たせなくなるので、樹体は衰弱すると思われます。

ですから、シラカバの場合は 40 年から 50 年ぐらいが寿命ですので、枯れてもいい老齢樹を剝皮の対象にするのが理にかなっています。今回の皮を剥いたシラカバはおそらく 40 年以上です。もちろん、材は問題なく利用できます。「シラカバは死して皮を残す」ということです。

ともあれ今回の活動は、内容が多岐にわたる充実したものでした。最後に、茅場に咲いていた夏の花を紹介します。

ヒメシジミ　今回は乱舞する姿は見られず

楽しみしていたヤマユリも猿の被害で少ない(左)
右上はクマイチゴ

左上　ヨツバヒヨドリ
上　ノアザミ
左　トリアシショウ
左下ウツ ボグサ
右下　ヤマアジサイ（エゾアジサイ）

■２０２０定例活動④
「奥利根水源の森林（もり）」でリトリート
－森の香りとクロモジの香りを楽しみました－

草野　洋

９月３、４日「奥利根水源の森林でリトリート」を実施しました。

奥利根水源の森林は、平成３年に当時の水上営林署（林野庁）が尾瀬の南東に位置する関東の奥入瀬と言われる照葉峡に近い武尊山自然休養林内に設定しました。低ダム群や魚道付き堰堤、開閉水門式堰堤などのモデル治山施設として森林の防災機能を強化しながら森林浴などのレクレーションを楽しめるよう管理道、駐車場、遊歩道、水遊び場、キャンプ場などを設置したレクレーション施設で、一帯は関東一の広大なブナ林となっています。

１日目　参加者９名は、キャンプ場の近くの水遊び場の清流の音を聞きながら昼食をとりました。そのあと、ミーティングを行い水源の森林の施設や今日の予定を説明しました。

今日のプログラムは、この森の奥にある「田代湿原」までのトレッキングリトリートです。体力や体調の関係で、2 人は北山さんが車で管理道から先回

りしました。一行本隊は、200 年生のブナの巨木群の中、「フィトンチッドを浴びながら森林浴の道」を登り、管理道に合流したところで一休み。伐採が入っていてもちゃんと更新している森林の中で、ブナ林などの天然林の伐採と更新（択伐）について説明しました。

そのあと管理道を少し歩き、登山道へ。田代湿原へ登る登山道は木道が設置してあるもののぬかるみがあり、滑りやすくなっているところが多くありました。ブナの巨木やシナノキ、ダケカンバの勇壮な自然林の中を歩くと、多忙で酷使していたからだと

心が癒されていくのが分かります。途中には初秋らしく、名前もわからないキノコがたくさん生えていました。

出発から１時間１０分ほど経って、先行した３人が待っていた田代湿原の入り口に着きました。合流した一行は、田代湿原の周遊道を歩いて景色を楽しみました。３０年ほど前に来た時には遊歩道のそばまで水位があったように記憶していましたが、

田代湿原と湿原に咲くリンドウ

今は一帯の草原化、乾燥化が進んでいるようです。初夏にはヒメカイウの群落の花で有名なこの湿原がですが、ヒメカイウがどんな状態なのか心配されます。

この日は曇天でしたが雨に降られることもなく終了し、１７時半には宿の並木山荘に到着しました。その夜の車座講座は急遽、草野が「ブナという樹木の特性」とこれまで見た各地のブナ林を話題としました。

２日目　夜はかなり激しい雨が降りましたが、朝から青空がのぞく好天気です。まず、柳沼さんの指導でリトリートプログラムにそった準備体操（写真・上）をしたあと「ゆるぶの森」を歩きオオバクロモジを採取しました。採ったクロモジの葉をもぎ、小枝を短く切り、蒸留装置で蒸留してエキスを抽出します。

上段　採取したクロモジとクロモジの葉
中段　クロモジの葉蒸留装置と蒸留後のクロモジ
右下　スプレー小瓶に小分けしてお土産

蒸留装置の熱源は達磨ストーブ、冷却水は十郎太沢の湧水です。

約１時間で５リットルほど取れました。これをスプレー付き小瓶に分けて参加者はお土産としてお持ちかえり。スプレーすると周囲にすごく良い香りがします。香りのお土産とは気が利いています。切った小枝を湧水で煎じたクロモジ茶も、木の香りがしておいしいものができました。

この時季の上ノ原は夏から秋の花が咲いています。写真を揚げておきます。

左側上から
ハギ
シシウド
ウドの花
オミナエシ

右側上から
ツリガネニンジン
オオヤマホクチ

前回の活動で挿した池の周りの挿し木は、ヤナギの活着は悪く意外やタニウツギがほとんど活着していました。タニウツギの花に囲まれる池が出来そうです。

今回のプログラムは、１日目の森の香り、２日目のクロモジの香りと「香りの中でのリトリート」となりました。

ススキの花

■２０２０定例活動⑤
「茅穂採種とミズナラ林整備」

草野　洋

いよいよ秋本番の季節、上ノ原茅場は紅葉と草紅葉になり収穫の時期を迎えます。その前に、ススキの穂（種）を採取する作業を、塾の活動として初めて実施しました。

ことの発端は今から 3、4 年前、ヘリコプター会社に勤めていた時、災害地を一緒に回った緑化技術者の友人から航空緑化の資材として、上ノ原のススキの種の採取の話がありました。友人は種苗会社の技術者を連れて上ノ原を訪れ、一緒に茅刈もしました。その後音沙汰がなかったのですが、今年の８月にメールで種採取の打診がありました。

その理由は次の通りです。かなり以前から生物多様性・生態系保全に影響する輸入種制限・国内種の使用遵守をかなり強く叫ばれていたですが、国内種の確保がむつかしいことやコストの関係で輸入種に頼った施工が行われていました（日本の種を中国などで栽培したものであるが、海外で栽培することで現地の植物と交雑して遺伝子の攪乱が起こっていることも問題とされている）。それがコロナの影響で海外との往来がむつかしくなり、加えてアメリカの干ばつの影響で緑化植物の種子輸入が困難となったことで、「日本でも種子を採る」という気運になったようです。このように施工地の近場で採取された種を使い、生態系や生育に影響を及ぼさないようにすることを「郷土種緑化（植栽）」といいます。

「航空緑化」とは、急峻、大規模・広範囲、道路がないなど機械や人力での緑化が困難な山腹崩壊地や山火事跡地を、ヘリコプターを使い緑化する方法で、バケットという大きなバケツのようなものに、ススキ、ヤシャブシ、ウツギなどの種子、肥料、接着剤、着色剤と植生基材（どろどろの液状のもの）

左　このような山腹崩壊地が航空緑化の対象地
下　ヘリに緑化資材を積み込む地上基地、左奥に見えるのが緑化する崩壊地

ヘリにぶら下げたバケット

を混合したものを散布して、植生の回復により土砂流出防止を図る工法で、「国土強靭化」に貢献する災害復旧工事です。ススキは、貧栄養のやせ地でもいち早く発芽・生育し、土砂の移動を抑え、樹木の種子の生育基盤を作る大切な役目を果たします。

ススキは風媒花で、8 月～9 月にかけてその個体の半径 2 メートルぐらいの範囲で受粉し、その後結実しますが、受粉率は約 3 割とされ、同じイネ科のイネは自家受粉するので受粉率は９０％になるのに比べて、自家受粉しないススキの受粉率はかなり低いようです。結実した種は熟すると綿毛で風に乗って新天地に運ばれます。受粉・結実していないものは綿毛のままススキの穂に（枯れ尾花）状態で残ります。なので、枯れ尾花の種は「しいな」ということになります。

右上　10 月初めの上ノ原のススキ
右中　熟したススキ
左上　ススキの種の付き具合
右下　ススキの綿毛と種

9 月初旬の活動の際に花が咲き穂が赤くなっているのを確認していますので、10 月の初旬なら熟しているだろうと今回の活動で採種を試みました。

試みという意味は、本格的には来年からになりますので、今年は採取時期・方法を検討するとともに、1 日でどのくらい採種可能なのか、「行程調査」を行い、データをもとに１ｋｇ当たりの売り渡し価格（買い上げ価格）を設定（交渉）することにしました。1 日目に、全員で茅穂を採取することにして、百均で買ったハサミで茅穂を刈り、腰に下げた土嚢袋に入れていきます。１時間もすると袋が重くなりました。同時に参加者の中から若・壮・老（男女）の代表を 5 人選んで 1 時間の採取量を測定しました。その結果、生総重量で 5.34ｋｇ、平均 1.07ｋｇとなりました。（写真・左）

茅刈でススキ全体を収穫の対象として見ていましたが、茅穂に注目するとまた違った風景が見えます。青空をバックに穂を見上げるようにチョキチョキ。その音もいい響きです。背の高いススキの時はすこし苦労しますが、その代わりいい穂が取れます。穂の採取は道路から離れていて茅刈をしないところ、屋根茅に不向きな低いススキが生えているところを選びます。こうして 11 名が採った茅穂は約 15ｋｇ、これは生重量ですので乾燥させると半分ぐらいになるでしょう。これを古民家に運び 1 昼夜乾燥させ、次の日に段ボールに詰めて種苗会社送りました。

古民家で乾燥

種苗会社からの連絡によると少し湿り気はあったが、種の付き具合も問題ないとのこと。採取時期、方法はこれで何とかなりそうです。上ノ原のススキの種が関東周辺の「郷土種」として崩壊地の復旧に貢献する目途がつきました。同時に今まで無価値だった茅穂が「茅場の恵み」となり、集落の現金収入ひいては茅場の保全に繋がりそうです。4 年前の種まきが芽を出しました。この後の生育に乞うご期待。

2 日目は、「ゆるぶの森」のミズナラ林整備を行いました。

北山塾長が「抜き切り」をする際に思った方向に安全に伐倒するために必要な、ロープ作業を指導しましたが、なかなかうまくいき

ませんでした。その後、安全性確保、材の利用、将来の生育を考慮した選木方法の指導、実際に手ノコを使い伐採する方法などを指導してもらいました。
10 月の好天に恵まれた新しい試みの作業もうまくいき、いよいよ 10 月末は茅刈です。

◆参加者感想　　松尾和幸

おはようございます。
一昨日・昨日と「草原と森の再生プログラム」に参加しました。
１日目の「ススキ刈り」をしました。「十分な量」を刈ることができましたが、袋に穴が開いてしまいました。
２日目は「間伐作業」をしました。ここでは、ロープを上げる体験もありました。「多少のコツ」が必要でしたが、ある程度の高さまで上げることができました。
今回の参加者は、10 人程度とあまり多くありませんでしたが、6 月に参加した人たちとも会うことができました。参加者みなさんのおかげで、また「いい経験」をすることができました。今月末の活動には、残念ながら参加できないと思いますが、よろしくお願いします。(2022 年 10 月3日)

小さな地球「茅葺合宿」リポート

藤岡　和子

昨年秋、コロナ過で行き場を失っていた上ノ原の茅の引き取り手として名乗りを上げてくださったのが、千葉県鴨川市釜沼集落に暮らす林良樹さんでした。彼が代表を務める一般社団法人『小さな地球』のプロジェクトのひとつに茅葺き再生活動があります。

小さな地球プロジェクトとは、2019 年、房総半島を襲った台風１５号での被災を機に、里山の保全から創造へ動き始めたプロジェクトです。眠れぬまま迎えた台風一過の朝、釜沼集落の頂上に建つ古民家『ゆうぎつか（勇気塚）』の外へ出た林さんは、その

光景に目を奪われたそうです。そこには、ゆうぎつかの屋根をすっぽり覆っていたトタンが、嵐で全て吹っ飛び、茅葺きの姿に戻ったゆうぎつかがありました。朝陽に照らされ、濡れ輝く茅の美しさ、茅葺き越しに望む里山の風景。林さんは、瞬時に茅葺きの再生を誓ったのだそうです。直ぐに協力を呼びかけ、賛同者とともに『小さな地球』を立ち上げられたと伺いました。

茅葺き再生プロジェクトは、２０２１年から毎年２週間の茅葺き合宿を開き、３年かけて葺き終える計画です。茅葺き職人は、兵庫県北区『くさかんむり』代表の相良郁弥さんを筆頭とした職人衆。くさかんむりに留まらず、茅葺き職人ネットワークで聞きつけ、茨城県や静岡県、地元千葉県の職人まで集結し、確固たる技術で合宿に集まる人々を支えてくれます。相良さんは言います。

> **職人だけで葺き替えてしまえば、一月やそこらで葺き替えられてしまう。でも、昔は、職人を呼び集落の人たちが協力して材を集め、手元をしたり、雑務をこなし葺いていた。どうすれば家が保たれていくかを、誰もが知っていた。その土地で、そこから採れるものだけで葺いていた。そういう結の文化を復活させたいという思いが、林さんの思いと合致したので、３年かけ合宿形式で行うことをお受けしたのです。**

学びながら、人と人、人と自然、都会と田舎をつなぐ地縁血縁を超えた新しい結によって失われていく茅文化、茅葺き屋根を再生していきます。

プロジェクト２年目の今年、８年間毎年茅刈りの手伝いをしているにも関わらず、実際どのように使われていくかを知らない私は、上ノ原の茅の行方を知りたくて、9 月 1 日～9 月 14 日に行われた茅葺き合宿に 9 日間参加してきました。

葺き替え１年目は、損傷が一番ひどかった西面から着手。屋根の骨組みの修繕や軒付けに時間を掛け、西面の２段目まで茅を葺いて合宿が終わりました。今年は、その続きから。トタン棟が吹き飛んだ屋根には棟がありません。ビニールシートで養生しただけの棟では、せっかく葺いた２段も、一年間の風雨で少し垂れ下がっていました。まずは、その垂れた茅を叩き

上げるところから始まります。茅を運び上げる人と叩き戻す人、職人の指示でふた組に分かれて進めていきました。準備が整うと、ようやく葺き替えに取り掛かります。

工法は、平葺き。葺き替えに使用した茅は、ススキです。ススキといっても、職人にとっては多種存在するようです。ゆうぎつかの屋根には、近くの集落の古民家解体でいただいた古茅、房総の業者から仕入れた千葉県の茅、そして上ノ原の茅の３種類を使用します。

「えらいベッピンさんやなあ」上ノ原の茅を手に取った職人が呟きました。古茅に上ノ原の茅を重ね、房総の茅で蓋をして、押さえ竹を乗せ縄で絞めていく。幾重にも葺き重なる三つの産地の茅が織り成すグラデーション。相良さんは言います。

みなかみのがあって、古茅と房総の茅が引き立つのです。この茅葺きは、みなかみのがあってこそ、この美しさがでるのです。この味なんです。新品の茅だけでも出せません、古茅だけでも出せない。

古茅と去年刈った茅、そして葺き上げている今がつくり出しているモノ。過去、現在、未来が途切れることなく繋がっていることを、これからも続いていくゆうぎつかの家は、私たちに語りつなぐ継承のかたちなのではないでしょうか。

合宿の１日の流れをお話します。

朝８：００職人作業開始。９：３０までの１時間半で、昨日の直しとその日の段取りを整えます。９：３０～１０：００職人休憩。合宿参加者と合流し、１０：００から職人の指示で１２：００まで作業。地元の料理名人が日替わりで作る美味しいごはんを食べて、１３：００から休憩を挟み１６：３０まで作業。職人は道具の手入れをしたり、参加者はのんびりしたり。お風呂をすませ、１９：００から夕ごはん。そのまま宴会となり、２２：００にお開き。寝床に戻ります。

合宿は、長期参加の人、1日置きの人、週末だけの人、子連れの方、学生、自分の家も葺き替えたい人と、いろいろな人がやって来るワークショップ形式。昨日今日の素人が大勢屋根に上がって葺いています。「素人で強度は大丈夫なのですか？」相良さんに質問しました。「普通は、こうはいきません。これは施主さんの懐の大きさです。」それならばと、林さんにも質問しました。すると、目を輝かせて

日数、手間がかかっても、茅を葺く仕事にたくさんの人に関わって欲しい。結の文化復活のためには、必要だと思っているからです。ほら、合宿って毎日が楽しいでしょう。毎日が驚きでハッピーに包まれているでしょう。

針１本使わず葺いていく、縄を結ぶ指先、屋根に立つ姿　、職人の振る舞いひとつひとつが美しく、見惚れてしまう日々。参加９日目、とうとう西面最終段に取り掛かります。切られた棟向こうを恐る恐る覗き込んでみると、茅の穂先越しに海が見えました。まるで上ノ原に立っているかのよう。

茅は大地から切り離した時のまま

屋根肌に並ぶ姿に

遠く望む海に

あの草原を思う

飲水思源

春　野焼き跡の末黒野から芽生える姿

夏　ははそのの泉の水を飲み伸びる姿

秋　その命を土に還すススキを刈る音　肌触り

冬　雪積もる前に降ろす白息

私の刈った茅が、何十年、何百年も家として生きる。そう想像する日がくるなんて思ってもいませんでした。昔から続く入会の仕事が、茅を葺く仕事と重なって、そこかしこに美しさと楽しさ、喜びが転がる日々。感無量です。

遠く離れた群馬の山奥と、太平洋岸の房総半島。「茅を売りたい」と「茅を買いたい」。どちらもその土地では、どうすることも出来なかった困った同志が結ばた『現代の結』。

ここには書けなかったのですが、どんな状態の茅で届けて欲しいのか、直接職人にお聞きすることが出来たことは、大きな収穫でした。これから、みなかみの茅を美しいと誉めていただいたことを励みに、茅刈り文化の継承に活かせていければと思います。

藤原だより－現地事務所報告－
みなかみ町と株式会社カインズが パートナーシップ協定を締結

北山　郁人

みなかみ町と株式会社カインズが「利根川源流の森林資源有効活用パートナーシップ協定」を締結しました。

この協定は、「SDGｓ未来都市計画（2022～2024）～水と森林と人を育むみなかみプロジェクト 2030～」を掲げるみなかみ町のビジョンにカインズが賛同し実現したものです。利根川源流の森林と水を守り、生かし、広める役割を持つみなかみ町の新たな林業の発展に向けたパートナーとして、事業活動を通じて経済・社会・環境の価値を創造する取り組みを行います。森林資源の有効活用に関する協定を締結するのは、カインズとしてもみなかみ町としても初めてです。

内容は、以下の４項目を中心に取り組みます。

① 間伐材を利用した薪をカインズ店舗網で販売。収益の一部を自伐型林業育成の基金として還元
② 自社チャネルを使用した、みなかみ町が推進する「自伐型林業の担い手」増加のための告知活動
③ みなかみ町木材ステーション運営に関わるノウハウの提供および、子ども向け教室の運営、コミュニティづくりのノウハウ提供
④ 山林環境保全等に係る活動の実施

この協定の第一弾の取り組みとして、みなかみ町にあるカインズスーパーセンター月夜野店と群馬県内の４店舗で、間伐材を利用した薪を販売してもらっています。その一部には、上ノ原周辺のミズナラ林の整備で伐採した間伐材も使われています。

～編集後記～

『茅風通信』67 号は、10 月 1、2 日の定例活動⑤までの実施報告と、「小さな地球」の茅葺合宿に参加した藤岡幹事の報告が中心です。

10 月末の青水の茅刈りと、三年振りに再開された麗澤中学校の奥利根フィールドワーク、上ノ原も選ばれた「草原の里 100 選」認定証授与式の模様は、次号での報告となります。

本年度に入り収束するかに見えた新型コロナは、夏頃から第 7 波が襲来、青水の活動も所々でその影響を被りました。しかし、助け合いの精神で乗り切っただけでなく、様々な発見もしながら活動を継続出来たことに、心から感謝です。

上ノ原ではシカの食害が課題になってきました。また、今年の茅刈りでは、カモシカが草原を疾走する姿を見ました。野生動物との予期せぬ遭遇は時に危険なこともありますが、晩秋の上ノ原でシカの鳴く声を聞いたら、猿丸太夫の歌のように、また違った情感が沸くかもしれません。（稲）

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
声きく時ぞ秋は悲しき